

毎月1回、身近な問題に関する学生の議論を掲載しています。感想や意見をお寄せください。〒960-8602 福島民報社地域交流部。ファックスは024(531)4117、メールはochiki@fukushima-mi.co.jp(氏名・電話番号を明記)

渡辺先生 本学には学生相談専属のカウンセラーがいて、悩みを抱える学生のサポートをしている。学生相談は、大学運営や研究の観点からも非常に注目されている。悩みがあるにもかかわらず、相談を利用しようとしたい学生に対するアプローチが急務となっているが、今日はこのメンバーで「相談のしやすさ」をテーマに議論したい。どんな要素があれば、学生は相談を利用しやすくなるだろうか。

高杉 そもそも、学生相談が行われている場所や時間帯が不明確であったりするので、まずはこういう先生がこの時間帯にこの場所にいて、という広報活動が必要だと思う。

小玉 ポスターなどの呼び掛けをはじめとした広報活動はもちろん大事だけど、相談する人自身の問題もあるかもしれない。例えば、自分の悩みが相談のレベルに達しているかどうか分からず、こんなことを相談していいのかなと思ってしまうことがある。プロに相談していいのかという判断基準が難しい。

佐藤 そんな時は、プロのカウンセラーではなく、まず大学にいる先生や

職員さんに話を聞いてもらう、というようなクッションが必要になるのではないか。でも、不安が重すぎて、周囲には話せずに自分だけで抱え込んでしまう人もいそう。相談を利用するとか、相談の手段すら思い浮かばない人もいるのではないか。

高野 佐藤君の「悩みを自分だけで抱え込んでしまう」という意見に関連

して、対人援助職（心理職、福祉職）を目指している身としては、自分が患者さん側になっていいのか、という不安もある。プロを目指しているのに、自分で解決せずに人に相談するのはどうなんだろう、と考えてしまう。

高杉 対人援助職を目指している人はもちろん、たとえ目指していないとも、助けを求めるることは弱いこと、と

いう意識が大学生にはありそう。

渡辺先生 自身の悩みを自らの力で解決する、という意識やスキルはとても重要だね。でも、そうしたスキルと同じくらい、他者にヘルプを出すというスキルも大切なんだ。対人援助職は、他者からのヘルプに応えていく仕事でもある。だからこそ、他者にヘルプを出すスキルの重要性を意識してもらいたい。

小玉 「他者にヘルプを出すスキル」と考えると、助けを求めるることは弱いこと、というような意識は薄まるかもしれない。

渡辺先生 もちろん、個人が自身の意識を変えることに加え、学生がヘルプを出しやすい環境を大学がこれからも提供していくことは大切だ。学生と接点を持つ教職員が増え、その教職員が大学生の心の悩みに関する知識を有していて、学生相談カウンセラーになじやすいという環境を整えておく。こうした、大学全体で学生を支えるというコミュニティーアプローチの視点が、相談のしやすさにつながっていくとも考えられるね。

二次回は12月第4週に掲載予定

大学の学生相談

全体で支える環境を

福祉学部福祉心理学科
写真左から佐藤俊介さん、小玉安紗
未さん、高野友哉さん、渡辺宏周助教、
高杉光之介さん（学生はいずれも3年）

